

楊昌濟における異文化受容

張偉雄

(一)

毛澤東が自分の青年時代を回顧した時、自分の先生について次のように述べていた。

私に最も強烈な印象を与えた教師は、イギリスに留学し、帰国した楊昌濟でしたが、後に私はかれの生涯と密接に関係することになりました。かれは倫理学を教え、理想主義者で、道義性の強い人物でした。自身の倫理観を非常に固く信じ、学生たちが正義の立場にたち、道徳的で高潔な人間になることを望むようしむけました。^①

楊昌濟は毛澤東にとって極めて密接な関係にある人物である。毛澤東が湖南の第一師範学校に在学した時、楊昌濟は倫理学、教育学を担当する先生であった。後に毛澤東がまた楊昌濟の紹介で、北京大学図書館に務めるようになった。そして楊昌濟の娘楊開慧が毛澤東の妻にもなったのである。

楊昌濟は（一八七一―一九二〇）新旧教育制度の激しい変動期の知識人であった。三十歳までに、かれは科挙試験の為に中国の伝統的な学問を一生懸命に勉強し、幾度も試験に挑戦したが、失敗した。一九〇一年清朝政府は科挙廃止、学校開設、留学生派遣などの「新政」を実行することにし、各省に留学生奨学金を設けた。このような情勢の下で、一九〇三年、楊昌濟が今までの科挙試験のための勉強を放棄し、官費留学生の試験に合格して、

日本留学に出発した。後にかれは自分の留学の動機について次のように書いた。

私は少年時代から、すでに教育に従事する志を持っていた。後に時局が大きく変わり、万国の相互交流が盛んになったことに従い、国内の人々が変法自強を提唱して、東西両洋各国の成功したところに倣い、学校を創立して、教育の普及を図ろうとした。私はこの時世のもとに世界に目を向き、知識を求めなければ、社会を指導する責任を負うことができないと思い、外国への留学を決心したのである。日本に六年留学したのち、さらにイギリスに三年余り、ドイツに九ヵ月ほど留学した^②。

楊昌済はこのように、自分の志を実現するために、長い外国留学生生活を始めたのである。かれが東京についてのは、一九〇三年三月二十七日のことであった。そして、まず嘉納治五郎主宰の弘文学院の速成科で日本語を覚え、後に東京高等師範学校に転入して、一九〇九年の春まで合計六年、日本での留学生生活を送った。日本での留

学を終えて、かれはさらにイギリスのエジンバラ大学へ三年間留学し、哲学、倫理学、教育学などを勉強した。一九一二年楊昌済はエジンバラ大学を卒業した。そのあと、かれはドイツへ赴き、九ヵ月間の教育研修を行った。海外の留学生生活をすべて終え、帰国したのは一九一三年の春である。前後十年間に及ぶ長い留学生生活だったのである。

六年間にわたる日本留学は、楊昌済の思想形成に大きな影響を与えた。外国生活の経験によって、かれは外国文化を通して、自国の文化を検証するという習慣を身につけたのである。帰国してからも日本は楊昌済にとって身近な存在であった。かれは日本に対して強い関心を持ち、ほとんど毎日日本の新聞を取り寄せて読んでいた。かれの日記によると、忙しくて未読の新聞がたまったら、気が済まないほどであった。これについてかれの日記には、このような文が残っている。

まだ読んでいない東京の朝日新聞は、十数日間分も机の上に溜まってしまった。これは誠にいけないことである。今後新聞が来たらすぐに読まなければ

ならない。今日は旧い債務を返済するつもりで、溜まっていく分を全部一遍読んでしまおうと思う。³

このように、かれは日本の新聞を読むのを日課とし、できるだけ日本のことを身近に感じられるように努力していた。新聞のほかに、かれはまた日本の教育学や心理学、倫理学などの本を常に参考にして、自分の教育実践に役たてようと努めた。かれは同時代の多くの中国人と同じように、単なる一種の個人的な日本趣味によって、日本に関心を寄せたのではなく、危機に直面している母国に、異文化の刺激を求める姿勢で、日本に関心を寄せていたのである。楊昌済の行った仕事の多くは、日本を鏡に立てて中国を論じることであった。

倫理学担当の教員として、楊昌済は常に倫理道德の角度から、自国民の生活習慣に目を向けていたのである。長い歴史を持つ中国は、優れた文化遺産を所有していると同時に、もちろん、無数の悪弊をも負の遺産として持っている。近代中国の多くの有識者たちは、中国の近代化を考える時、自国の悪弊との闘いに頭を悩まされてきたのである。悪弊を取り除くことが近代化への道を切り

開くことにつながると考える人も多くいたのである。

楊昌済も勿論このような問題にも直面していたのである。近代化を目指す意味での教育救国を主張していたかれは、教育を通じて、国民の中に存在している悪弊を取り除いていくことを、自分の使命と自覚していた。楊昌済は、まず人々の現実生活の面から、つまり衣食住の習慣や祭りの風習、衛生習慣、通信自由の保護など、現実生活のいろんな所に存在している問題にとりかかったためである。

十年間も留学生生活をしてきた楊昌済にとって、外国で経験し、合理的だと認識したものを、自然に自文化を考える上での参照物になっていたのである。中でも曾て同じく儒教文化に深く影響されてきた日本が、如何に近代化に取り組んできたのか、伝統文化は如何に近代化の成功に、順応して行くべきかは、楊昌済にとって興味深いものであった。

長い留学生生活を送った楊昌済が、如何に自分の外国経験を生かして、西洋の衝撃のもとでの祖国の危機を、異文化の受容によって、対処しようとしたのか、そして、異文化の衝撃のもとで、楊昌済は中国文化と外国文化の

位置付けを、どのように考えていたのかを、具体例にそって考えてみたいと思う。

(11)

中国の伝統文化の中で、個人と集団の関係において、個を犠牲にして集団のために、というのが良しとされてきた。このような風土の中で、近代化に必要とされている個の尊重、個の確立は、如何にも疎かにされていたのである。楊昌済は教育者として、この面において、まず個人のプライバシーの尊重、通信自由の保護などについて、多くの呼びかけをしてきた。第一師範学校の先生を務めていたころ、かれは学生たちに次のようなことを呼びかけた。

学生たちにプライバシー尊重の要義を講義した。最近修正した法律では、人民が法律の範囲内において通信秘密権を享有すると、明記している。凡そ文明国家の政府は必ず人民の通信秘密権を尊重することである。それと同時に、人民もまた他人の通信秘

密を守らなければならない。また自分も自分の権利を守る姿勢が必要である。中国人はこの点について全然理解していない。勝手に他人の手紙を開封したりしてしまうことが、ときどき発生している。これは法律を守る考えがなくて、野蛮人の悪弊である⁽⁴⁾。

一ヵ月ぐらいしてから、楊昌済はまた雑誌に載っていた曹工丞という人の書いた「通信道德」という文章を借りて、自分の論を強く立証しようとした。楊昌済はこの文章は、自分の日記にある「通信秘密権を論ず」という自分の文章の主旨と同じもので、通信の自由を守ることが、社会を改良することの第一歩だとの考えを示した。かれは曹工丞の文を引用して、イギリスの社会道德の良さ、郵便通信の良さを中国人に示した。

ロンドンには郵便局の職人が八万人もいる。毎日六回配達をする。市民たちは朝起きてから、洗面をし、着替えをして、食堂に入る。テーブルの上に花が飾っており、家族皆の手紙がそこに置いてある。食事のあと、各自が自分の手紙を読み、読み終わっ

たら、各自はまた自分の分をしまっておくのである。夫婦であろうと、親子であろうと、兄弟姉妹であろうと、許可がなければ、勝手に他人の手紙を読むことは絶対にないのである。また、郵便局が手紙を紛失したり、開封したりすることを一度も聞いたことが無い⁵⁾。

楊昌済はこの文を借りて、ロンドンの通信事情を誉めすぎるのではないかと感じさせるほど描き、通信の自由がきちんと守られていることを、自国民に示し、個人のプライバシー尊重の美しさを称え、一種の社会改良に結ぼうとした。

楊昌済は、社会の弊害を排除する具体的な行動の一つは、よい衛生習慣を国民に訴えることだと考えていた。貧困の生活状況下に当時の中国人は、一般的に衛生状況が悪くて、体弱であったことから、諸外国列強に「東亜病夫」と侮辱的に呼ばれていた。楊昌済はこれに対して、非常に心を痛めていた。かれは国民の衛生意識を高めることに力を入れていた。「余の社会を改良する意見」という文章において、かれは健全な体を育てるため

には、まず衛生に関する意識を高めなければならないことを、次のように強調して書いた。

最近、日本人の書いた『中国の分割される運命』という本を読んだが、中には中国人の不潔な習慣を痛烈に指摘している。例えば新聞社の出入り口の辺りで、人が勝手に小便をしたりしている。文明人の出入りをしているところでさえ、このような状態なら、他のところのことは想像がつくものであるという。これを読んで、実に恥ずかしかった⁶⁾。

同じ文章で、かれはまた他に沢山の不衛生の悪い習慣、例えば勝手に地面に痰を吐くとか、農家の人は便器を室内に置くとかの例を挙げて、これらの悪い習慣を一日も早く直してほしいことを呼びかけた。上記文章の続きで、かれはまた日本の医学者の説を借りて不衛生の習慣の恐さを証明した。

最近、私は日本の医学博士北里柴三郎の著作『肺の健康法』という本を読んで、初めて肺病発生の原

因が分かった。ある種の結核菌が肺部に侵入し、中で蔓延して、肺の組織を破壊するのである。……この結核菌は乾いても死なないので、もし痰の中に結核菌があったら、その痰が地面に吐いて乾くと、埃といっしょに空中に舞い上がり、人に吸われると鼻から肺に入り、吸った人は結核菌に感染されるのである。だから、痰は地面に吐いてはいけないのである。吐くとしたら必ず痰壺の中に吐いて、痰を掃除するときは、必ずお湯と消毒剤で洗わなければならない。中国人が勝手に地面に痰を吐くことは、その危険を知らないからである。

文章の続きに楊昌済は外国人のよい衛生習慣を紹介し、中国人がこれに習い、自分の不衛生の習慣を直そうと呼びかけた。楊昌済はこのように自分の外国での生活経験から国内の弊害を照らして、長い因習によって人々が平気になってしまいくつかの悪い習慣の弊害を指摘し、その改良を促した。楊昌済は教育者として、物事ができるだけ分かりやすく説明し、改良の方法まで提案したりしていた。また、社会改良の仕事は些細なことから

始めることを、自ら手本を示し、実行を促したのである。かれの日記には次のような一節がある。

日本、イギリス、ドイツの人々は皆寝ているときに、ランプをつけておくことはしない。しかし、中国人は大体一晩中ランプをつけたまま寝ているのである。これだと、灯油を浪費するだけでなく、空気も汚れてしまい、健康によくないのである。我が家にも昔はランプをつけて寝ていたのだが、最近では消してから寝ることにした。⁷⁾

これは一見ごく些細なことのように見えるが、長い因習の力から抜け出そうとする当時の中国人にとって、これは非常に大事な啓蒙運動である。大きなスローガンを掲げて、大きな仕事をすることも必要だが、楊昌済のようになで着々と地味に国民に呼びかけることも大事な仕事なのであった。このような、直接現実と向かい合っており、地味に行う仕事のほうが、むしろ難しいものである。当時海外から帰国した留学生の多くは皆留学したことを資本として、出世しやすい官吏の道を選んでいった。しか

し楊昌済はそうはしなかった。当時人々は欧米留学を金箔付き、日本留学を銀箔付きと、その留学の値打ちを例えて言った。楊昌済は日本留学六年、イギリス留学三年、ドイツ留学一年という経歴を持っている。言わば金銀二重の箔を身につけている者である。しかしかれは自分の留学の経歴を、官僚となって出世する為の手段、或いは金儲けの為の資本とはしなかった。かれは「治生篇」の中で、「今日の中国は、科挙時代の積弊を受けつなげて、才能のある者、欲望のある者は皆官僚の道に集まってくる」ことを、批判的に見ているのである。かれは教育事業を愛している。教育を通じて、自分の経験してきた異文化の良さを自国民に紹介し、社会の改良に貢献しようとしたのである。

(三)

近代以来、西洋文化の強い衝撃のもとで、自国の文化はどう対応すべきか、中国の多くの有識者の苦悩の種もあった。この中で、「中体西用」とか、「全盤西化」とかは代表的な論調であった。楊昌済は祖国に対する責任

感を強く感じている人であり、長く異文化での生活を経験してきた人間として、かれは自国文化の栄養となる異文化を導入し、母国の進歩に役立たせることは、自分の使命だと自覚していた。しかし異文化を導入する面において、かれは全般的な西洋化を主張するものではない。この点において、かれは文化の比較を心得ている。かれが文化の多様性についての理解があり、如何なるものでも互いに長所を取って短所を補うべきだと考えていた。こういう意味で、外国に学ぶ時には、必ず自国の国情を熟知し、選択的に自分の国情に合うようなものを学ばなければならぬと楊昌済は主張していた。次にこの方面でのかれの発言を具体的に見てみたい。

一九一四年、留学から帰国して翌年の十月、楊昌済は「勸学篇」という論文を発表した。文章のなかに、かれは外国文化を学ぶ時に際してあるべき姿勢を、次のように述べている。

一国には一国の独自の民族精神がある。まるで一人の人間には一人の人間の個性があるようである。一国の文明は全体的に他国から移植してくることは

できない。……よい医者さんは必ず病人の病状をよく観察をし、よい治国者は必ず自国の特性を理解すべきものである。われわれ留学した人は、帰国してから、国に役立てようとしたければ、まず自国の国情をよく調査をし、何を守るべきか、何を改善すべきか、何を捨て、何を取り入れるべきかを、はっきりと把握できてから、初めて自国に合う改革ができる^①。世界の大勢に應じることができるのである。

この文から楊昌済が異文化を導入するときにあるべき姿勢を伺う事ができる。盲目的な模倣を避け、国情に合う選択的な受容を主張していたものである。楊昌済は学問に対して、柔軟な態度の持ち主でもある。同じ文章でかれはまた次のように書いている。

私は孔子の教えを尊重しているが、しかし、これによって、もっぱら孔子だけを尊び、諸子百家を排斥することはしない。更に仏教を排斥し、キリスト教やイスラム教を非難することもしない。私は宋学から入門したのであるが、しかし同時に漢学の考証

学をも認めている。私は程、朱の学から始めたのだが、陸、王の学の優れた所も感服している。これはわたしの各学派に対する態度である。

以上のように柔軟な考えを持っている楊昌済は、伝統文化というものは自国の長い歴史の中から育ててきたものだから、大事に付き合って行くべきだと主張している。かれはできるだけ客観的に自国の文化、異国の文化を見るように努力してきた。例えば家族制度についてかれは次のように述べている。

農業国は家族主義が発生しやすい、工業国は逆に家族制度を破壊しやすい。農業に従事するものは原住民が多くて、同じ宗族の人は永遠に付き合っていくのである。しかし、工業や商業に従事するものは、いろいろな所に出ていき、同じ宗族の人がばらばらになって、会ったり連絡したりすることが少なくなリ、互いの感情はまるで赤の他人のようになってしまうのである。こういう事情は中国の家族制度と西洋の家族制度とを比較する時に、わきまえて考えな

ければならないものである。私はしばしば中国の家族制度には利もあり、弊もあると言っている。『周礼』曰く、「宗は族を以て民を得、相生き相養い、相維ぎ相制し、民情乃ち渙散せず、而して安居樂業の風有り。」これは中国の家族制度の長所である。しかし一方、人々は皆自分の家族を優先的に考え、私を以て公を滅ぼす恐れがある。だから家族制度が強すぎると、国家や社会の発展を妨げることがある^⑩。

楊昌濟は、このように東西文化の違いを分析する時、できるだけ客観的にその形成の諸要因を探り、その利害をはっきりと国民に見せようとしているのである。かれはまた西洋のような教会の無い中国において家族制度の果たしている役割を次のように指摘した。

家族制度は、人々の心を連結するものであり、西洋の教会みたいなものに、代わるものである。これは全部捨てては行かない。その弊を捨て、その利を生かすべきである^⑪。

楊昌濟は近代化を進める上で有効とされている西洋文明に多くの賛辞を呈している面もあるが、しかしかれは決して全面的な西洋化を主張するものではなかった。かれは西洋人の中国の祭りごとに対する非難に、次のように反発したことがある。

西洋人は我が国の先祖祭りを愚かなことだとしている。まあ愚かだと認めてもよいが、人類はみんな愚かな域から抜け出すことができない。キリストを崇拜することも非常に愚かなことではないか。あるアメリカに留学した人は「中国にきた宣教師は祖先や父母や孔子を祭ることを禁止している。これは実に布教活動の一大障害だ」という。かれは祖先や父母や孔子の前で跪いて礼拝することは、主キリストに悪いことではないと考えている。この留学生の話聞いて、ある人はかれを義も勇もある人だと誉めた。なぜならこの留学生自身がキリスト教徒でありながら、こんな大胆な発言ができたからである^⑫。

以上の言葉から楊昌濟は決して盲目的な西洋崇拝者で

はないことが分かる。かれが西洋文明の紹介者と自覚していると同時に、また非常に自国の伝統文化の擁護者でもある。一九〇三年の二月、楊昌済が祖国を離れ、外国留学に行くに当たって、自ら自分の号を「懷中」と付けた。^③どこにいても、中国を懐けるとの意味が含まれていた。楊昌済は洋学者であると同時に、造詣が深い国学者でもある。留学から帰国したあとでも、かれは国学の研究を続けていた。帰国してから翌年、かれは自分の儒学に関する研究を『論語類鈔』にまとめて発表した。北京大学の教員を務めていた時、かれは自分の講義を「内容は西洋の倫理学だけではなく、中国の儒学、例えば孔、孟、周、程、張、朱、陸、王及び船山の学説も混ぜて、講義すべきだ」と決めていた。楊昌済は国学を修める重要性を次のように述べている。

深く自国の文化を知っている人は、自国の固有の文明を知り、自尊心や、愛国心を持つのである。国内の風俗習慣について、その起源や意義を知ることができれば、祖国に対して嫌がる感情は起らないのである。したがって、国の伝統に対して急激な変

革を求めようとはしないのである。これは国家存立の基礎であり、教育者として、よく心得なければならぬものである。^④

楊昌済は教育者として、このように学生たちに教えているだけでなく、かれ自身も自らこのように実行していたのである。楊昌済の学問の起点は宋学であるが、かれは宋学が中国の学術史の中で、一つのピークを形成できたのは、インド哲学を取り入れたからであると思っている。「いま、西洋の学が東に押し寄せてくるに当たって、誰が宋代の有識者のように、それを融和し、新しい学派を確立できるのであろう」。楊昌済の終生の努力は正にこのような「学派」の確立に捧げられた。

十九世紀の末、二十世紀の始めを生きた楊昌済は、近代化の波に押さえられ、自ずから母国の近代化への道を考えざるを得なかった。かれは海外留学の道を選び、異文化から新しい養分を見つけて、自国の伝統文化の活性化にしようとした。かれはその時代に良い刺激となれるものを選別し、教育者として、国民に一生懸命に伝えてきた。かれはまたバランスよく異文化を選択的に導入す

る事の重要性をも訴えていた。かれのこのような異文化受容の心得は、学生の毛澤東にも大きな影響を与えていたのである。かれの異文化受容の姿勢は今日においても参考されるべきではないかと思う。

注

- (1) 『中国の赤い星』 エドガースノー著、松岡洋子訳 筑摩書房 一九七五年 八頁
- (2) 「余帰国後對於教育之所感」『湖南教育雜誌』一九一三年 第七号
- (3) 楊昌濟『達化齋日記』（改訂版）湖南人民出版社 一九八一年版 一五二頁（以下日記の引用はこの本に基づく）
- (4) 『達化齋日記』三十頁
- (5) 『達化齋日記』五七頁
- (6) 「余改良社会之意見」雜誌『公言』第一卷第二号 一九一四年
- (7) 『達化齋日記』四八頁
- (8) 「治生篇」『新青年』雜誌 第二卷 第四号 民国五年
- (9) 「勸学篇」雜誌『公言』第一卷第一号 一九一四年
- (10) 『達化齋日記』六八頁
- (11) 『達化齋日記』九四頁
- (12) 『達化齋日記』一六五頁
- (13) 王興国『楊昌濟生平及思想』湖南人民出版社 一九八一

年版 四六頁参照

(14) 『論語類鈔』楊昌濟 宏文圖書館 一九一四年

(15) 『達化齋日記』一九七頁

(16) 「余帰国後對於教育之所感」『湖南教育雜誌』一九一三年 第七号

(17) 王興国『楊昌濟生平及思想』湖南人民出版社 一九八一年版 五頁参照

（比較文化・日中交流史／文化学部教授）